



アルバイトに関する学生の実態と保護者の意識調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大前, 義弘, 北岡, 宏章, 高橋, 参吉, 中馬, 義孝, 畠山, 信敏, 宮本, 皓生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007927

アルバイトに関する学生の 実態と保護者の意識調査

大前 義弘* 北岡 宏章** 高橋 参吉***
中馬 義孝* 畠山 信敏** 宮本 皓生****

A Research on the Actual Conditions of Students Working at a Part-time Job
and the Opinions of Their Parents

Yoshihiro OHMAE*, Hiroaki KITAOKA**, Sankichi TAKAHASHI***,
Yoshitaka CHUMAN*, Nobutoshi HATAKEYAMA**, Teruo MIYAMOTO****

ABSTRACT

In our college students are advised to refrain from working at a part-time job because it deprives them of studying hours, brings about fatigue and deviates their interest from school activities. But recently more and more students are engaged in side jobs and this tendency seems still on the increase. It may be a time when a positive guidance concerning part-time job is required. We surveyed the actual conditions of students engaged in side jobs together with the opinions of their parents.

Key Words: Part-time Job, Student, College of Technology

1. まえがき

先に、我々は本校の2・3年生を対象に生活意識と実態に関するアンケート調査¹⁾を行なった。その結果、アルバイトに従事している学生がきわめて多い事実や学習時間が全般に不十分であることなどが明らかになった。

すなわち、調査対象者全体の80%以上が長期休暇中にアルバイト経験を持ち、さらに、長期休暇中以外の平常時(以下、「平常時」という)のアルバイト経験も2年から3年にかけて増え、3年では60%近くの学生がアルバイトを経験している(表1、表2参照)。

一方、学習時間については、「全然しない」が25%、「1時間以内」が47%にも達している(図1参照)、2・3年生は高専の中核学年であり、同年令の高校生に先んじて大学レベルの教科内容が登場する時期でもある。そのような学習内容を理解するには、学習時間が余りにも少なすぎるといえる。

このように、アルバイト経験者数の増大や学習時間数の低下、さらには、本校のような都会校にみられるアルバイトに手軽に従事しうる環境等を考えるならば、アルバイトの問題を積極的に学生指導に取り込んでいくことが必要と思われる。

そこで、我々は、学生のアルバイトの実情をより詳しく知るために、昭和62年2月と昭和63年1月に、本校3年生を対象にアンケート調査を実施した。調査方法は、昭和61年度の学生に対しては、アンケート調査用紙に無記名で記入する方法とパソコンと対話しながら入力させる方法²⁾(試験的に1クラスのみ実施)を用いた。昭和62年度の学生に対しては、全員パソコンと対話しながら入力させる方法で実施した。回収率は、昭和61年度は回答者206名で、95.7%(在籍者209名)、昭和62年度は回答者192名で、94.6%(在籍者203名)であった。

さらに、保護者のアルバイトに対する考え方を知るために、同様のアンケート調査を保護者に対して実施した。なお、調査用紙は郵送ではなく、学生に持ち帰らせ、担任が回収した。回収率は、昭和61年度は回答者163名で78.0%、昭和62年度は回答者151名で、74.4%であった。

本稿は、これらのアンケート調査の結果に若干の考察を加えたものである。

昭和63年4月11日受理

* 機械工学科(Department of Mechanical Engineering)

** 一般教養科(Department of General Education)

*** 電気工学科(Department of Electrical Engineering)

**** 工業化学科(Department of Industrial Chemistry)

2. アルバイトの動機

長期休暇中と平常時のアルバイト経験者数を表1、表2に示す。ここで、昭和60年度の調査結果は文献1によるもので、昭和61、62年度は今回の調査結果である。今回の調査は、過去1年間のアルバイト経験を聞いたものであり、長期休暇中では約80%の学生がアルバイトを経験しており、平常時でも約60%の学生がアルバイトを経験している。

ところで、そのアルバイトの動機は何であろうか。アルバイトの動機について、長期休暇中と平常時に分け集計したものを表3に示す。ここで、割合は複数回答であるので回答者数で割ったものである。回答は3つまでの複数回答であったので、殆どの学生がまず第一に「お金が欲しい」(97.0%, 平常時の割合)と答えている。次に「時間が余る」(37.8%), 「社会を知りたい」(33.2%), 「家にいても面白くない」(25.5%)の3つの選択枝の中から2つを答えられた者である。「お金が欲しい」以外の動機としては、「時間が余る」、「社会を知りたい」であり、この順位は、62年度の平常時で「時間が余る」と「社会を知りたい」が入れ替わるが、長期休暇中か平常時に関係なくその傾向には変りがない。また平常時では、長期休暇中に比べて「時間が余る」と「社会を知りたい」の割合が低くなっている。

それでは、最も大きな動機であるお金は何に使われる

のであろうか。アルバイトの収入の使途(複数回答で2つまで)は、表4に示す通りである。多い順に列举すると、オーディオ、パソコン、ビデオ、バイク等の機器購入費(46.0%), 遊興費(41.4%), 衣服費(32.5%)車の免許取得費(21.9%)である。平常時では、長期休暇中に比べて、「遊興費」の割合が高くなり、「機器購入費」の割合が低くなっている。

一方、生活費・学費は、平常時でさえ僅か(17.7%)である。この結果から分かるように、生活費・学費のためにアルバイトをしている学生は少ない。ちなみに、昭和60年に学徒援護会が実施した大学生のアルバイト調査³⁾を見てみると、学費・修学費(12.9%), 食費・住居光熱費(14.0%), 娯楽・嗜好費(41.0%), 課外活動費(15.3%), その他日常費(15.6%), その他(0.4%)である。大学生でも、娯楽・嗜好費がかなりをしめ、生活費・学費は27%程度である。本校のように自宅通学が前提であれば、当然生活費の部分は割り引いて考える必要があり、大学生も本校の学生(3年生)も同じ様な傾向にあるといえよう。

すなわち、アルバイトの本来の修学を維持しようとする目的は薄れてきており、現代社会の物質的豊かさの中で、アルバイトの目的は多様化してきているが、その豊かさをより一層追及するためにアルバイトをするというような形態に変わってきているといえよう。

一方、保護者の意識も子供のアルバイトに対して、賛

表1 長期休暇中のアルバイト経験者数

	60年度 2年	60年度 3年	61年度 3年	62年度 3年
あり (%)	160 (80.0)	169 (87.1)	155 (75.2)	162 (84.4)
なし (%)	40 (20.0)	25 (12.9)	51 (24.8)	30 (15.6)
回答者数	200	194	206	192

表2 平常時のアルバイト経験者数

	60年度 2年	60年度 3年	61年度 3年	62年度 3年
あり (%)	73 (37.4)	108 (57.8)	122 (59.2)	132 (68.0)
なし (%)	122 (62.6)	79 (42.2)	84 (40.8)	62 (32.0)
回答者数	195	187	206	194

表3 アルバイトの動機

	長期休暇中			平常時		
	61年度	62年度	合計(%)	61年度	62年度	合計(%)
お金が欲しい	149	159	308 (96.9)	112	116	228 (97.0)
時間が余る	75	80	155 (48.7)	42	47	89 (37.8)
社会を知りたい	62	72	134 (42.1)	29	49	78 (33.2)
家にいても面白くない	35	44	79 (24.8)	29	31	60 (25.5)
友達(仲間)が欲しい	19	28	47 (14.8)	16	24	40 (17.0)
生産的な仕事をした	5	13	18 (5.7)	3	9	12 (5.1)
学校にいても面白くない	12	3	15 (4.7)	13	3	16 (6.8)
回答者数	153	165	318	116	119	235

表4 アルバイト収入の使途

	長期休暇中			平常時		
	61年度	62年度	合計(%)	61年度	62年度	合計(%)
生活費・学業費	23	17	40 (12.8)	26	16	42 (17.7)
クラブ活動費	6	8	14 (4.5)	5	6	11 (4.6)
機器購入費	72	99	171 (54.6)	45	64	109 (46.0)
車の免許取得費	39	53	92 (29.4)	22	30	52 (21.9)
遊興費	40	63	103 (32.9)	45	53	98 (41.4)
衣服費	50	46	96 (30.7)	44	33	77 (32.5)
旅行	30	18	48 (15.3)	17	12	29 (12.2)
その他	18	12	30 (9.6)	13	9	22 (9.3)
回答者数	148	165	313	118	119	237

成する(6.1%)、条件次第で賛成する(89.2%)で、学生のアルバイトに対して非常に寛容的である。

次に、アルバイトのお金以外の動機について考えてみる。「時間が余る」については、我々教師の側としては理解し難いのであるが、本校の学生の学習時間をみれば容易に理解できる。以前に本校で実施した生活実態調査¹⁾によれば、2・3年生の平均学習時間は、「なし」が25%を占め、さらに「1時間以内」の者とを合計すると72%にも達する。ちなみにNHK世論調査部「日本人の生活時間1985」の調査結果³⁾と比較すれば大学生と同様に小学生以下である。この結果と本校の調査結果の比較したものを図1に示す。

したがって、アルバイトの動機として、「時間が余る」は本来学習しなければならない苦であるのに、それを怠っているためではないか。特に問題となるのは、平常時のアルバイトで、従事日数の多い場合であろう。

次に「社会を知りたい」であるが、いわゆる、社会勉強は、本校を卒業後、多数の学生が実社会へでて働くことを考えれば、在学中に社会を知ることは望ましいことであろう。しかし一方で、学生がアルバイトを正当化するための理由として挙げるのも事実である。

また、アルバイトの動機とアルバイト収入の使途をク

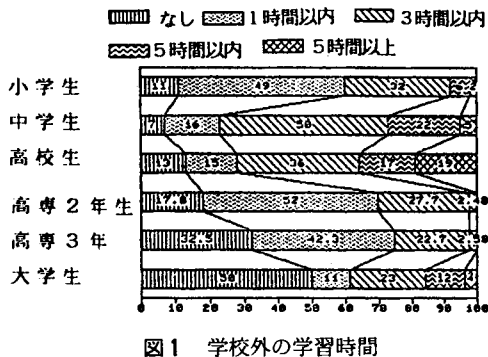


図1 学校外の学習時間

ロス集計したところ、特に、昭和62年度の学生の平常時のアルバイトに関して、使途を「遊興費」と回答していた者は、動機に関して「家に不満がある」と「友達(仲間)が欲しい」と回答している割合が、他の動機に比べ20%程度高くなっていた。このような学生に対しては、個別の指導が必要だと思われる。

3. アルバイトの実態

アルバイトの経験者数については表1、表2のとおりであるが、アルバイトを全然経験していない者は9.3%に過ぎない。高専生は学年が進むにつれて、ほとんどの者がアルバイトに従事するようになる⁴⁾といえよう。

アルバイトを経験した学生の割合は年度によって余り大きな差がみられなかった。この調査では、学校生活に「とても満足」と「やや満足」と回答した者を合わせると26.4%、「とても不満」「やや不満」と回答した者を合わせると37.7%であり、「普通」と答えた者が35.9%であった。これらの者のアルバイト経験を比較すると満足者が平常時の従事日数でやや少ないものの、余り大きな差がみられなかった。

長期休暇中におけるアルバイトの従事日数を2年の春休み(30日)、3年の夏休み(45日)、3年の冬休み(15日)に分けて図2に示した。アルバイトをしていな



図2 長期休暇中のアルバイト従事日数(休暇期間に対する従事日数の割合)

いは2年の春休みには61.6%であったが、3年の夏休みには39.2%まで減少している。3年の夏休みには18.3%の者が休暇中の3分の2以上の期間をアルバイトに費やしている。運動クラブに属している者は回答者の45%、文化クラブに属している者は23%およびクラブに属していない者は32%であり、それらの学生の夏休み中のアルバイト経験を比較したのが図3である。クラブに属していない者の方がクラブに属している者よりも従事日数が少し多くなっている。クラブへの所属による差は、2年の春休みでは3年の夏休みと同じ傾向であったが、3年の冬休みでは、その差は全然みられなかった。

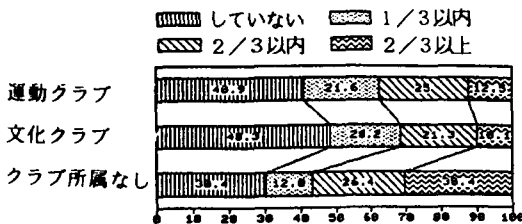


図3 クラブ所属別の夏休み中のアルバイト経験

3年生のこの1年間の平常時にしたアルバイトの週間従事日数と時間帯および職種を表5に示す。クラブに属している者と属していない者にそれらの差はみられなかった。63.8% (254名) の者がアルバイトに従事している。そのうち、休日のみやっているものが19.8%

(79名)であった。38.9% (155名) の者が授業のある平日に週2日以上アルバイトをしている。一方、週5日以上もアルバイトをしている者が18.8% (75名)にも達している。休日のアルバイトはほとんど昼間行われているが、2日以上している者の時間帯は80% (125名)までが夜(午後6時以降)であり、しかも、その62.4% (78名)の者の職種は飲食業である。このように平常時に多くの時間をアルバイトにさいておれば、高専の教育内容を十分に理解できないまま進級して、学年全体のレベルが低下し、さらには高専卒業生に対する評価を落としてしまうのではなかろうかと案じられる。

表5に3年の夏休み中にしたアルバイトの職種とその時間帯も付記した。夜に従事している者は14.1% (56名)と平常時に比べて少ない。飲食業の占める割合も15.6% (62名)であり、平常時に比べて少ない。しかし、平常時に飲食業に従事している者の約80% (50名)の者が夏休み中にも飲食業に従事していた。この飲食業に従事している実態をみるかぎり、長期休暇中のアルバイトが平常時のアルバイトに連続的につながっていると思われる⁵⁾。「時間が余るから」とか「社会を知りたいから」

表5 アルバイトの職種と時間帯 (人数)

	1日		2日	3日	4日	5日	6日	7日	3年夏休み	
	休日	平日								
昼夜	73 6	8 3	7 18	6 23	5 21	7 22	4 30	1 11	179 56	
工場	5	2			1		1	4	1	39
飲食業	15		11	15	14	16	17	5		62
配達業	2		1	1	1	1	4			39
販売業	11		1	2	3	3	3	1		31
サービス業	8		3	5	5	4	4	2		24
家庭教師	33	6	9	4	3	3				10
他	4	3		2		1	2	1		34

という動機で始める長期休暇中のアルバイトでさえ、職種を慎重に選ばねばならないことを示している。

アルバイト先をどのようにして見つけたかを聞いたところ、長期休暇中では、新聞・雑誌で見つけた者が最も多く40.7%、友人・先輩の紹介が37.0%、家族の紹介が16.4%であった。平常時の場合には、友人・先輩の紹介が最も多く46.1%、新聞・雑誌が33.3%となり、家族の紹介は9.2%であった。かなりの学生が誘い合っ

4. 保護者のアルバイトに対する意識

回答した保護者の41%が学生時代にアルバイトを経験していた。回答者の子息がアルバイトをしたことがあると回答した保護者が90.8%おり、学生の実施した結果とほぼ一致している。

子供が高価なものを欲しがったとき、「自分でアルバイトをして買わせる」と回答した保護者が61.8%に達している。原則論として、子供がアルバイトを希望したらどのようにするかを聞いたところ、賛成6.1%、条件次第で賛成89.2%、反対4.8%であった。実際に子供がアルバイトをしたと回答した保護者が、子供がアルバイトを希望したときに取った態度を図4に示す。長期休暇中より平常時の方が反対や仕方なく認めた保護者が多くなっている。平常時のアルバイトについては、学習面

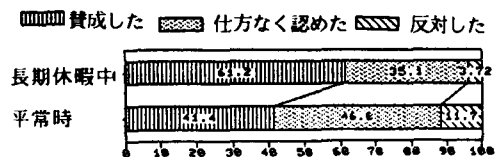


図4 アルバイト希望時の保護者の態度

がおろそかになったり、疲れてしまう等の心配をしている保護者が多いためと思われる。保護者は、仕方なく認めたと回答したものも含めて条件付きではあるが、アルバイトを許可する意向をもっていていると思われる。それは大学などの受験のない最終学歴校に入学させた保護者の次のような意識ではなかろうか。「勉強がほどほどにできておれば、就職は大企業に行けることだし、多少遊ぶことも大事だ。社会勉強にもなるのだから、学業を踏みはずさない程度でアルバイトをして、遊ぶ金や自分のほしいものを手に入れるための金は自分で額に汗して稼いだらいいじゃないか……」。

アルバイトのもたらすよい点と問題点と思われる項目について全保護者に問うた結果を図 5 に示した。保護者の 38.2 % が「学習が手につかなくなる」ことを心配している。「飲酒・喫煙」の心配は 34.8 %、「金使いが荒くなる」心配は 31.8 % である。逆に、「働くことの厳しさ」

や、「世間を知って社会勉強になる」と回答した保護者は、実に 80% 以上にも達している。調査前に我々が予想した以上に、保護者はアルバイトの意義を認め、問題点についても、そう案ずる程のことはないと考えているようだ。

実際にアルバイトをした子供の保護者に、事前に相談はあったか、目的がはっきりしていたか、収入額を知っているか、お金の使途を知っているかと問うたところ、いずれについても 90% 以上の保護者が把握していると回答している。

アルバイトをした子供の生活態度の変化に対する保護者の評価を図 6 に示す。保護者の評価は長期休暇中と平常時では若干異なる点もあるが、ほぼ同じ傾向にある。「疲労がみられた」と 50% 以上の保護者が回答している。平常時には半数の保護者が「学習時間が減った」と回答して、これは長期休暇中よりやや多く、後述するが、

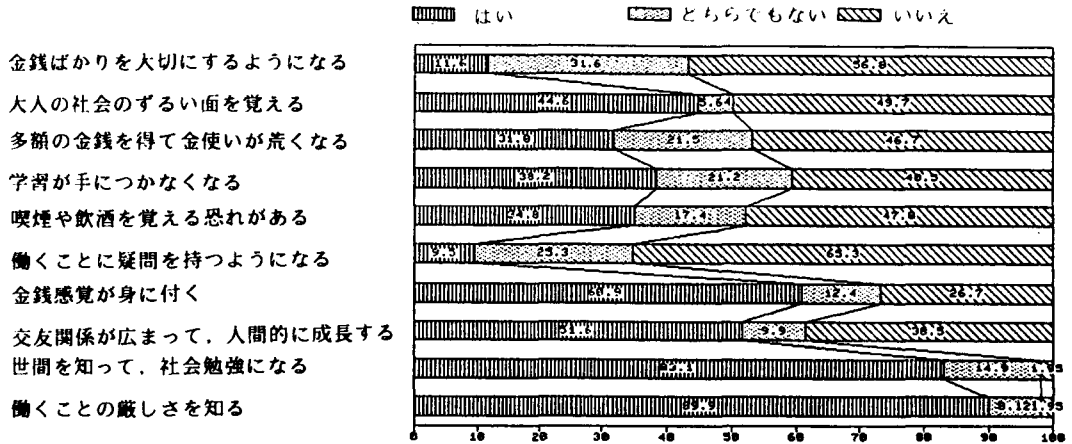


図 5 アルバイトの功罪に対する保護者の意見

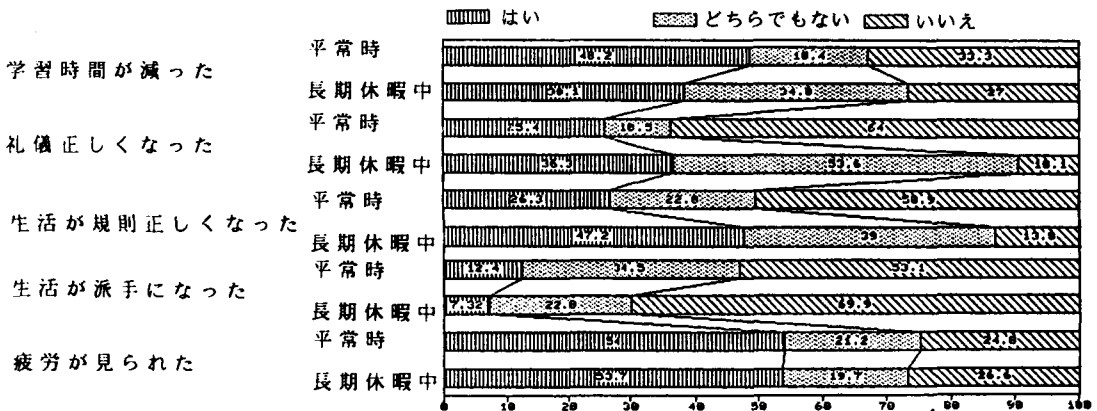


図 6 生活態度の変化に対する保護者の意見

学生の回答とは大きな隔たりがある。主観的な学生の判断より、客観的にみている保護者の判断の方が信頼できるであろう。「生活が規則正しくなった」という回答は長期休暇中に対して多くなっている。これは昼間アルバイトに出かけることによって規則的な生活をするようになったためである。

これらの調査結果から、保護者はアルバイトを社会勉強・労働体験としてとらえ、本人さえ自覚しておればマイナス面も少ないと考えており、子供が高価なものを欲しがったとき、条件付きではあるが、積極的といえるほどにアルバイトを許可している。その結果、学生は高価なものを手に入れたり、学生生活をエンジョイすることができたが、疲労が残る、学習時間が減少していると保護者は指摘している。

さらに、アルバイトをして高価なものを手に入れることにより学生の生活ぶりが次第にエスカレートする。そしてアルバイトが面白くなり、日数が増えたり、報酬の高いアルバイトを追い求めていく傾向が一般にみられるようである。たとえば、ある保護者がアンケート中に図7のように書いている。

中学の後半からオーディオ製品を取り揃え始め、こずかい、お年玉や入学祝いなどでは足りなくなりアルバイトをしないと云いだした。新聞配達なら許可をした(1年生の夏休み)。子供はこれらの製品が一応揃うと今度はオートバイに興味を持ち始め、親からは絶対に買ってもらえないため、長期休暇に入るのを待って時間給のよい職場へと変わり、自分の購買欲求を満たしている。お金が足りなくて3年生の4、5、6月の日曜日もアルバイトを始めたが、成績が芳しくないで単車のローンの残りを親が支払う条件で止めさせた(お金の使い方は無駄がなくすごく上手です)。

子供の好みが高級化し、人生の意義も考えずに、人生の目的は唯一職業のみという子供の姿勢にどう導いてよいのかと考えている。一人の親として、在学中には部活動に勉学に読書に熱中して欲しいのに、今の子供達は一人前の大人並みに金を使う生活を楽しむことを求めており、時代の流れを感じながらも、親としては言うべきは言い、従わせるべきは従わせなくてはと自分に言い聞かせている。

図7 ある保護者の意見

5. アルバイトのメリット、デメリット

3年生の90%以上がアルバイトをしており、学校の学習時間、クラブ活動時間以外の自由時間のかんりの部分をアルバイトが占めていると思われる。このような状況にあってアルバイトについてどのような指導をすべきか重要な課題であるが、決定的な指導方針を形成するまでには、なお時間が必要であろう。ここではアルバイトが学生生活にどのような影響を及ぼしているか考察する。アルバイトの功罪を学生はどのように自己評価している

のか、調べてみた。

アルバイトのメリットの第一は、「経済的に豊かになる」ことであり、動機の第一であることはすでに述べた、アルバイトで得た収入を学費・修学費に充てる学生が少数であるのは、すでに指摘している。収入は文字通り学生生活を大いにエンジョイするために使われている。平常時に夜間アルバイトをしている134名の使途においても生活費・学業費の占める割合(17.7%)は表4の大学生の場合³⁾とあまり変わらないことから苦学生とアルバイトというイメージはほとんどない。学生生活を物質的に豊かに送ることこそが彼らの関心事である。

学生の自己評価を問うた中で、社会勉強・生活面でのメリットと思われる項目を選び、調査結果を長期休暇中

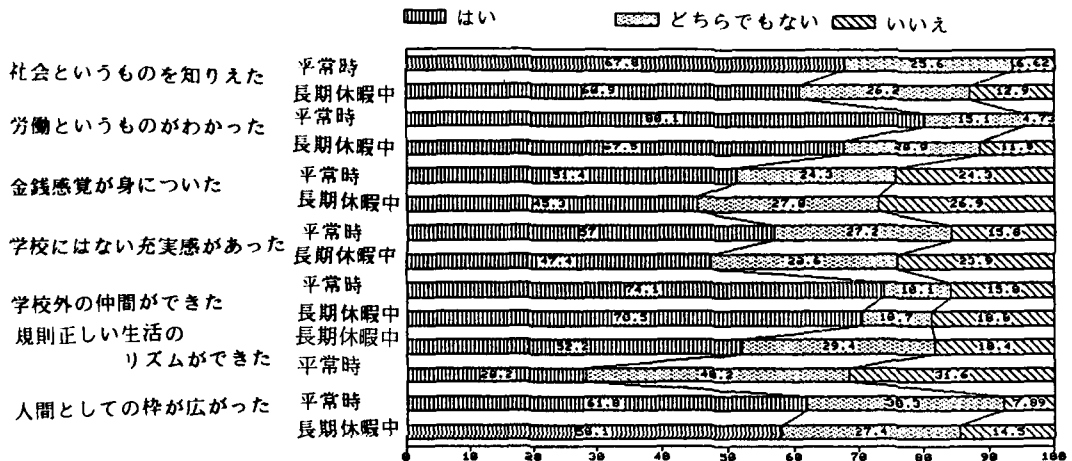


図8 アルバイトに対する学生の評価I

と平常時に分けて図8に示す。休暇中と平常時でも同様に肯定しているものは「社会を知ることができた」「労働がどのようなものかわかった」という社会勉強の面である。これはアルバイトをするための理由付けとしては、普遍的であるといえる。さらに「人間としての枠が広がった」というのも高く(50%)、学校生活では得られない勉強ができたと考えている。社会勉強だけでなく「学校以外の仲間ができた」というのも70%前後あり、広がった交際範囲を評価している。高専では、同じクラスが5年間続くという特殊な条件にあって、学生同士のつながりについては今後十分に検討しなければならない課題であろう。

「規則正しい生活のリズムができた」の項目に関して、休暇中と平常時では評価に差がある。休暇中では52.2%と高いのに対して、平常時には29.2%となっている。長い休みを無為に送るよりはアルバイトをして生活規律を維持するという点で、アルバイトには確かにメリットが認められる。しかし、平常時には正常の学校生活が支障をきたしがちであるのが実情であり、問題とすべき点であろう。

社会面・生活面でデメリットと思われる項目の意見分布を図9に、学習面でのデメリットを図10に示す。社会面・生活面では、「飲酒・喫煙を覚えた」というのは、極く少数であり、学生はアルバイトのデメリットにはあげていない。「金使いが荒くなった」という学生が約33%おり、機器購入や旅行など用途のはっきりしているもの以外にかなりの額が遊興費となっていることと符合していよう。「大人のずるさを見た」という学生も約43%いるが、これは社会勉強と表裏一体となっているもので、「学校の勉強がばかばかしくなった」という者は10%以下しかなく、学生の健全性を示すものといえよう。

「疲れて体調をくずした」という回答が19%とかなり低い。が、「体調をくずす」という表現にとらわれた回答かもしれない。保護者の調査では50%以上が「疲れがみられた」と回答しており、アルバイトによって疲れているのが事実であろう。特に「睡眠時間が少なくなった」と回答した学生が平常時には43.2%におよび、休暇中のアルバイトの場合との差が大きい。これは学習面のデメリットと深い関係がある。

学習面で「学習時間が少なくなった」ことを認めている学生が36.3%もあり、これは保護者への調査結果とも符合しており、学業の妨げとなっていることを物語る。しかし一方で、「宿題・レポートができない」ということはなく(60.3%)、「成績が下がった気もしていない」と回答し(48.3%)、学業とアルバイトを両立させているように自己評価している。つまり学業面でのアルバイトのデメリットをあまり問題にしていない学生が多いようである。しかし、このこと自体がすでに問題であるという指摘もある³⁾。5年間で高等教育を修得するという高専の特質を考えると、学習時間の減少は致命傷になりかねない。

ここで、平常時に夜間のアルバイトをしている学生を取り上げてみよう。このような学生は134名おり、その62.4%が飲食業に従事している。彼らのなかで「睡眠時間が短くなった」、「学習時間が少なくなった」、「飲酒・喫煙を覚えた」と回答した者は、飲食業以外の者より20%ほど高かった。さらにまた、平常時に飲食業でアルバイトした学生94名をみると、「飲酒・喫煙」、「人間としての枠の広がり」、「学校にない充実感」がそれぞれ飲食業以外の者より20%以上高い。「学校以外の仲間ができた」と84%の者が肯定している。飲食業には他の業種に見られない特徴があるといえよう。

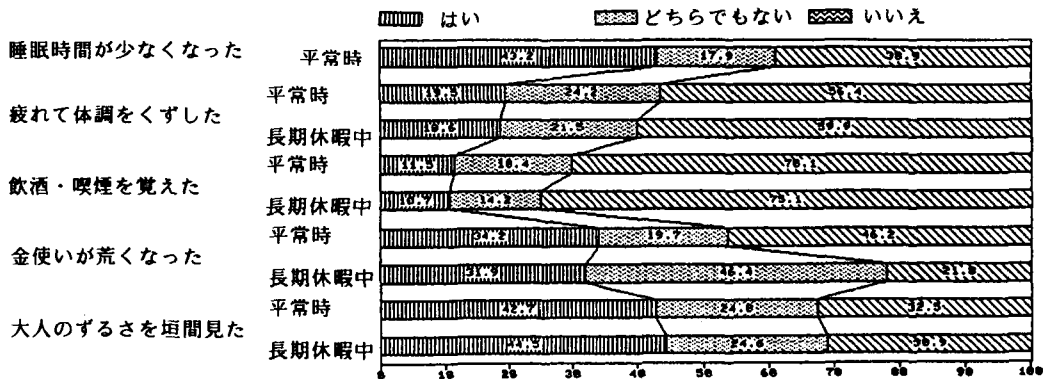


図9 アルバイトに対する学生の評価II

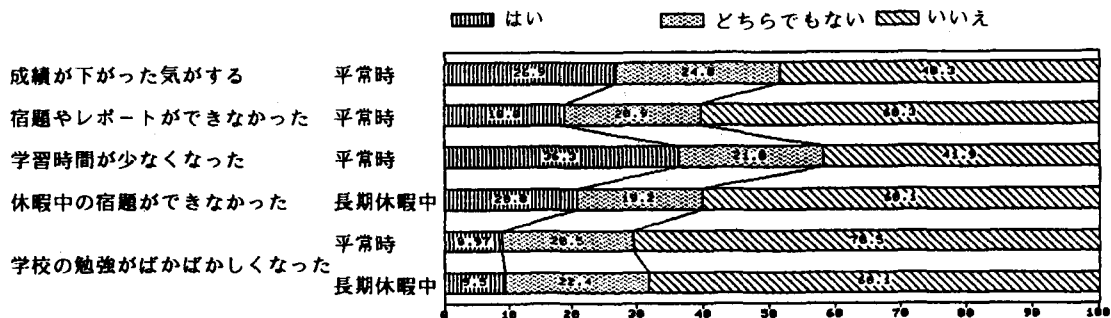


図 10 アルバイトに対する学生の評価Ⅲ

6. むすび

高専生の学習時間の少なさとアルバイト経験者の多さを知り、アルバイトの動機、実態およびその影響について学生と保護者に対して調査した。アルバイトには、広い意味での学生生活を送るのに必要な経済的基盤を作り、学校で得ることのできない社会・労働体験を積み、交友範囲が広がるというメリットがある反面、疲労が生じ学習時間が減少するというデメリットがある。メリットだけを体験・学習し、人間的にも成長する学生もあるだろう。しかし、アルバイトによる疲れが学習意欲を減退させ、学習時間が減少して成績を低下させ、その結果、ますます学習意欲が減退し、そしてアルバイトに熱中し、やがて本業化してしまい、本来の学業を放棄せざるを得なくなる学生も多い⁶⁾。特に、授業のある平常時にする夜間のアルバイトや飲食業のアルバイトは決して健全とはいえない事がわかった。アルバイトの功罪を考えると、時期・業種が決定的な要因である。

以上の点は学生も十分に自覚しているように見うけられる。図 11 に後輩がアルバイトをするべきかどうか相談にきたとき、どのように答えるかを問うた結果を示す。学生の74%が「職種によって勧め」、学生の50%が「長期休暇中のみを勧めている」のである。学生の健全な判断がここから読み取れるのではなかろうか。しかし、次第にアルバイトに誘惑され弱れていくところに問題があるように思われる。一方、「なるべく止めるように説得する」とか「絶対反対する」と答えた学生は11.5%しかなく、学生の大部分は学生生活を送るのにアルバイトするのは当然であると考えているようである。

本校ではアルバイトを奨励しないという方針であるが現実には、ほとんどの学生がアルバイトをしているという状況を直視し、学生の健全な判断を育成しながら、アルバイトへの指導を見直していかなければならないだろう。そのとき問題となるのは、時期や業種等のアルバイトの具

体的検討が第一であるが、学校教育への魅力を抱かせる広範な教育内容の検討も必要であるように思われる。

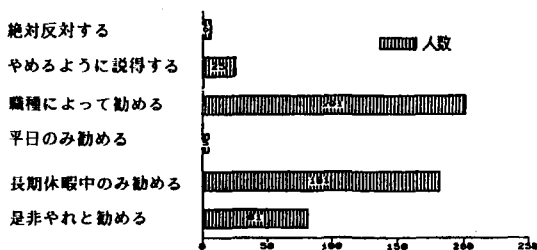


図 11 後輩へのアルバイトに対する学生のアドバイス

最後に、本校在職中に学生の生活実態調査を積極的に実施してまとめられた本校名誉教授杉野英太郎氏と現活水女子大学助教授野々村 昇氏に、深甚なる謝意を表します。

参考文献

- 1) 大前義弘ほか：学生の生活意識と実態に関するアンケート結果報告，1987. 3
- 2) 大前義弘ほか：アンケート調査支援システムの開発，大阪府立工業高等専門学校研究紀要，第22巻投稿中
- 3) 荻村昭典：学生アルバイトの現状と課題，大学と学生，252, 23 (1987)
- 4) 浅見 洋，高島 要：高専における平均的學生像，高専教育，8, 79 (1985)
- 5) 坪根治広，田中 洋：高専における修学指導に関する一考察，工業教育，26 (1) 27 (1978)
- 6) 犬田修正：本校における学生指導について，高専教育，8, 98 (1985)